

特別の教科 道徳（道徳科）

道徳科においては、それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切です。

◆ 道徳科における指導と評価の一体化

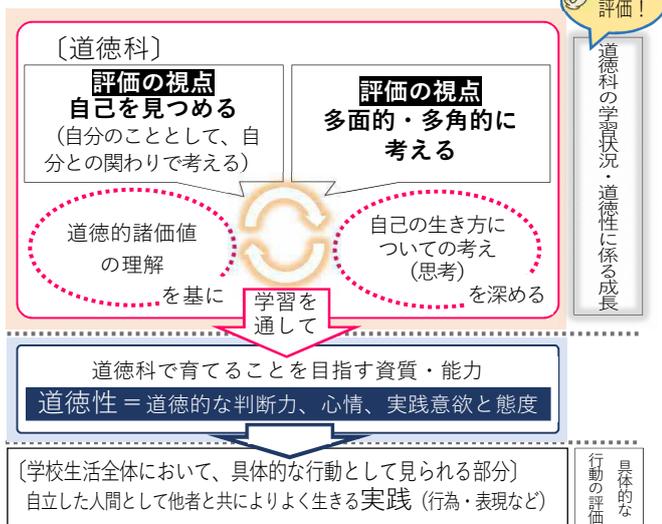
道徳科の評価には、「児童の学習状況を見取る評価」と「教師の授業に対する評価」があります。

① 児童の学習状況を見取る評価

児童が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すことが大切です。

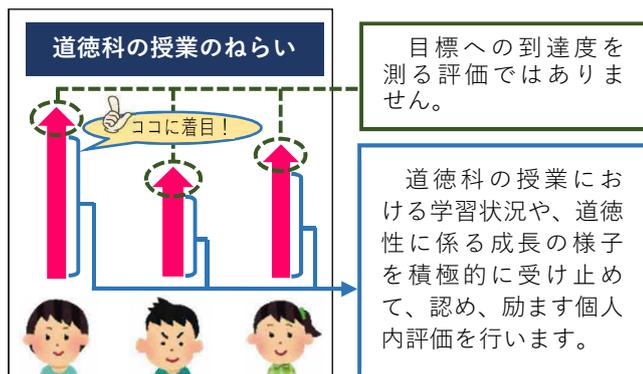
児童の評価においては、内面的資質である道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではありません。道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では、その学習状況や成長の様子を適切に把握し評価することが求められます。

【道徳科の学習活動と評価のイメージ】



また、道徳科の評価は、他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行います。

【道徳科における個人内評価のイメージ】



道徳科の評価に当たっては、次の2つの視点を重視することが重要です。

視点1 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接し、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが大切です。

【多面的・多角的な見方へ発展している児童の姿の例】

- ・道徳的価値の様々な面や支える根拠を考えている
- ・様々な立場に立って考えている
- ・焦点を絞ったり、視野を広げたりして考えている
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考えている
- ・人間の強さや弱さ等を捉えて考えている

視点2 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

道徳科では、児童が、登場人物の立場に立って自分との関わりで道徳的価値について理解したり、そのことを基にして自己を見つめたりすることが大切です。

【道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている児童の姿の例】

- ・登場人物に共感している
- ・教材の問題点等を自分事として受け止めて考えている
- ・日常生活や学校生活等を想起して考えている
- ・自分の生活を振り返って考えている
- ・自分だったらどのようにするか考えている

② 教師の授業に対する評価

教師自らの指導を評価し、その評価を授業の中で更なる指導に生かすことが、道徳性を養う指導の改善につながります。

明確な意図をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な児童の学習状況を想定し、授業の振り返りの観点を立てることが重要です。こうした観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現することになります。

【教師が自らの授業を振り返る評価の観点の例】

- ・道徳科の目標に基づき、道徳科の特質を生かした学習指導過程が構成されていたか
- ・指導の意図に基づいて発問されていたか
- ・児童の発言に傾聴し、反応を指導に生かしていたか
- ・教材・教具の活用は適切であったか
- ・指導方法は、児童の実態や発達の段階を踏まえていたか
- ・配慮を要する児童に適切に対応していたか

◆ 学習評価に関する事例

【POINT】

- ・ 道徳科における指導と評価の一体化を図り、質の高い授業を実現するためには、

- ・ 一貫した「指導の明確な意図」をもつこと

- ・ 道徳科の目標に基づいた学習指導過程を構成することが大切です。

【POINT】

指導の明確な意図

- ・ 道徳科の授業づくりに当たっては、授業構想の筋道である

- ① 授業者の意図
- ② 児童の実態
- ③ 教材の活用

について、一貫した指導の明確な意図をもつことが大切です。

〔①授業者の意図〕

教師が、ねらいとする道徳的価値について、どのような指導が必要だと考えているかを明らかにします。

〔②児童の実態〕

ねらいとする道徳的価値について、日常の道徳教育でどのように指導し、その結果、児童にどのようなよさや課題が見られるかを明らかにし、本時で特に考えを深めさせたいことを明確にします。

〔③教材の活用〕

授業者の意図、児童の実態を基に、発問の仕方など教材の活用の仕方を明らかにします。

【小学校第2学年】

1 主題名

「素直に伸び伸びと」〔A 正直、誠実〕

2 教材

お月さまと コロ（「わたしたちの道徳 小学校1・2学年」文部科学省）

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値〔授業者の意図〕

児童が健康的で自分らしさを発揮するためには、自分の気持ちに偽りのないようにし、明るく楽しい生活を心掛けようとする姿勢をもつことが大切である。

第2学年の時期の児童は、様々な人との関わりの中で、誤った言動をとってしまったときに、意地を張って非を認められなかったり、素直に謝れなかったりして、後から後悔の念が生じ暗い気持ちになってしまうことも少なくない。

指導に当たっては、自分自身の心に正直に、誤った言動をとってしまったときにこそ、自らを振り返って非を認め、謝ることで晴れ晴れとした気持ちになることに気付かせ、素直な心で伸び伸びと生活していこうとする態度を育てていきたい。

(2) 児童の実態〔児童の実態〕

誤った言動の後に、自ら非を認め、謝るなど、素直な心で伸び伸びと生活していこうとする態度を育てるために、道徳科以外では、次のような指導を行ってきた。

①特別活動「学級活動『ふわふわ言葉とちくちく言葉』」

自分も相手も大切にしようとする態度を育てるため、定期的に、言われてうれしかった言葉や悲しかった言葉を振り返らせてきた。

②当番活動・係活動・清掃活動

グループ活動で誤った言動が見られた際は、個別に言動について指導することに加え、誤った言動が生まれないようにみんなで明るい雰囲気をつくるためには、どのようなことに気を配ればよいか、グループ内で話し合う機会を設けてきた。

③日常の指導

友達同士のトラブルが見られた際は、教師から誤りを指摘したり、友達同士で非を言い合ったりするのではなく、児童に自ら謝ろうとする気持ちが喚起されるよう、事実関係から言動を振り返り、至らなかった点を考えるよう促してきた。

これらの取組を通して、児童は、概ね仲よく活動できるようになっているが、時に、自分が不利になったり、思いがうまく伝えられなかったりして気持ちが高ぶり、非があってもなかなか認められない場面が見られることから、この時期に、素直に非を認めて謝ることの大切さについて、さらに考えを深め、明るい心で楽しく生活することができるよう指導したい。

(3) 教材について〔教材の活用〕

①概要

コオロギのコロが、たった一人の友達のギロに意地悪をして怒らせ、素直に謝ろうかどうか迷っているときに、お月さまとふれ合い、自分を振り返ることで、素直な気持ちをもつことができるようになった。

②自分との関わりで、多面的・多角的に考えを深めるための工夫

素直になれていなかったコロや素直になれたコロを自分のこととして自分との関わりで考えたり、素直に伸び伸びと生活することの大切さについて、多面的・多角的に考えたりすることができるよう、涙を流した時のコロの気持ちを中心に話し合い、価値理解、人間理解、他者理解を深めさせる。

はじめの発問では、「二つの心」がたたかっているときのコロの気持ちを考え、人間理解を深めさせる。そのために、「あやまらなくてもいいんだ」と思う気持ちを自分事として話し合わせる。

また、中心的な発問では、草の露に映った自分の顔を見て涙を流したときのコロの気持ちを考え、価値理解や他者理解を深めさせる。そのために、コロが、ぽかんとして自分の顔を見つめているときに考えていることに着目して話し合わせる。

4 ねらい

素直になりたいがなれない気持ちや素直になれたときの晴れ晴れした気持ちを考えるを通して、素直に自分の非を認めて謝ろうとする態度を育てる。

5 学習指導過程

	<p>●学習活動</p> <p>○主な発問 (◎中心的な発問)</p> <p>・児童の反応</p>	<p>・指導上の留意点</p> <p>■評価</p>
導入	<p>●「素直」の意味について、イメージする。</p> <p>○「すなお」な気持ちって、どんな気持ちだと思いますか。</p> <p>・正直でやさしい気持ち。</p> <p>・思っていることが言えること。</p>	<p>・「素直」について考えを出し合うことで、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。</p>
展開	<p>●教材「お月さまと コロ」を読んで話し合う。</p> <p>○コロは、二つの心とたたかっているとき、どんな気持ちだったでしょう。</p> <p>・ギロくに悪いことしたな。</p> <p>・でも、今さらあやまれないよ。</p> <p>・きっと、また来てくれるよ。</p> <p>◎コロは、草の露に映っている自分の顔を見て、どうして涙を流したのでしょう。</p> <p>・あんなことしなきゃよかった。</p> <p>・本当はあやまりたい。</p>	<p>・(あやまらなくても いいんだ) と思ったコロの状況に共感し、素直になれないときの気持ちを話し合い、人間理解を深めさせる。</p> <p>・コロが草の露に映った自分の顔を見つめているときに考えたことについて、多面的・多角的に話し合い、価値理解や他者理解を深めさせる。</p>
	<p>◎(人間の弱さを捉える問い返し)あやまりたいのにあやまれないのはどうしてでしょう。</p> <p>・あやまれないのは、気持ちが弱いから。悪いのはぼく。(誠実、善悪の判断)</p> <p>◎(様々な立場で考える問い返し)あやまることができたら、ギロくんはどう思うでしょう。</p> <p>・コロくんが分かってくれてよかった。これからも仲よくしたいな。(思いやり、友情)</p>	<p>【POINT】</p> <p>ねらいに迫る「問い返し」多面的・多角的に考えさせるための「問い返し」を行い、児童の発言を整理しながら指導に生かします。</p> <p>ココが重要！ 指導と評価の一体化</p>
	<p>【POINT】 考えを深めさせる「発言の類型化」</p> <p>発言者が重視している道徳的価値を分析、類型化することにより、意図的に取り上げたり板書したりするなどして、学級全体に多面的・多角的な思考を促すことができます。</p>	
	<p>○次の日、コロは、ギロに何と話したのか演じてみて、演じてみたときの気持ちを話し合います。</p> <p>・役演技 何度か来てくれたのにごめんね。のせりふ ぼくがわがままだったよ。</p> <p>・演技後の 自分の気持ちが言えて、すっきりした気持ちになったよ。の気持ち</p> <p>●自分の生活を振り返る。</p> <p>○素直な気持ちで謝れたことはありますか。そのとき、どんな気持ちになりましたか。</p>	<p>■素直になれないときやなれたとき、それぞれの気持ちを考えるを通して、素直な気持ちの大切さについて考えを深めることができたか。</p>
	<p>【POINT】 自己理解を促す過程</p> <p>・生活や生き方を振り返り、そのときの気持ちを合わせて想起することにより、自己理解を深めさせることができます。</p>	
終末	<p>●学習の振り返りを書く。</p> <p>●教師の話を聞く。</p>	

【POINT】

道徳科の目標に基づいた学習指導過程

〔①道徳的諸価値についての理解〕
価値理解・人間理解・他者理解といった道徳的諸価値を理解するための発問を意図的・計画的に位置付けます。

〔②自己を見つめる〕
登場人物の置かれた状況に共感し、自分との関わりで考えを深められるようにします。

〔③物事を多面的・多角的に考える〕
多様な価値観に触れ、自分の考えを深め、判断し、表現することができるようにします。

〔④自己の生き方についての考えを深める〕
性急な変容を求めず、自分の生き方について考えを深められるようにします。

【POINT】

評価における学習状況の整理

・評価に当たっては、学習指導過程等を工夫した上で、
①目標に基づいた学習活動
②具体的な学習状況
③評価できる点を整理して見取ります。

〔本時における評価の例〕

①(学習活動)多様な意見に触れ、考えを深める学習活動を通して、
②(学習状況)友達の考えをよく受けとめながら、
③(評価できる点)幅広い感じ方や考え方で、物事を判断できるようになってきました。

【POINT】 道徳科の目標に基づいた授業を積み重ねる中で、大きくくりなまとまりを踏まえて評価

道徳科の学習状況の評価に当たっては、道徳科の学習活動に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があります。

学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握



〔評価の例：多面的・多角的な見方へと発展した児童〕
素直な心をもつことについて考える授業で、友達との話し合いを通して、「勇気を出して自分からあやまることができると自分も友達もよい気持ちになる」と自分の考え方を広げていました。

〔評価の例：自分との関わりで考えを深めていた児童〕
教材の登場人物の置かれた状況に共感して考える学習を積み重ねる中で、自分がその立場だったら、どのような行動をとるべきかを自ら考えられるようになってきました。